

乗り物絵本の歴史と魅力

平成 21 年 10 月 4 日

講師：関田 克孝

はじめに

本日は大勢の皆様にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。ただいま御紹介いただきました関田克孝と申します。約 40 年近く「のりもの絵本」などを研究、収集しております、その中で自分なりにある程度まとまったつもりで本なんかも出しましたが、まだまだ多くを見極めておりませんし、奥の深い世界ですから、これからもどんどん続けていきたいと思っております。「乗り物絵本の歴史と魅力」の概要をこれからお話しします。長いので座らせていただきますが、よろしくお願ひします。

I 「のりもの絵本」とは

1. 定義と範囲

まず始めに「のりもの絵本」とは、ということから入りたいと思います。「のりもの絵本」とは一体どんなものかと言いますと、図書館の分類ですとか、そういうものには一切ありません。決まった分類ではない言葉ですが「のりもの絵本」という言葉は割合、一人歩きしております。一般的な認識で言えば、書店の店頭には（最近では少なくなりましたが）スチール製のラックがありまして、そこには必ず「動物」、「遊び」といったテーマと一緒に「乗り物」がたくさん並んでいたのは、つい最近までの風景でした。B5 判くらいの大きさと厚手の表紙に「のりもの」ですとか「汽車」「電車」「飛行機」といった、そのものずばりの題名でたくさん並んでいたのを、皆さん御記憶ではないかと思ひます。それら全体を「のりもの絵本」という認識で、僕自身もそうですし、皆さんも大体「のりもの絵本」というとそういったものを中心に考えられたのではないかと思ひます。しかし、最近では絵本といっても乗り物や動物といったものだけではなく、それは観察絵本、知識絵本の一部であって、「のりもの」を物語の中に取り込んだもの、「のりもの」自身が擬人化されて主人公になったもの、そういうものもたくさんあります。例えば、今でも人気がありますイギリスの『機関車トーマス』なんかよい例です。僕も大好きな本なのですが、ああいう風に物語があって、しかも比較的忠実に実物を再現したもの、それからすごく芸術的に機関車や飛行機や自動車を扱って（実体のものとはかけ離れた形をしています）、それが物語の中心になったもの、多々そういう物語の中に「のりもの」が展開されているもの、これも「のりもの絵本」の一種と考えるように、最近はなってきました。以前は、観察絵本の乗り物が「のりもの絵本」ではないかという感覚が僕自身もそうですし、一般的にも非常に強かったのではないかと思ひます。

「のりもの」という言葉そのものは非常に古い言葉でして、江戸時代以前にもすでに言葉としてはありました。まあ原始、日本語の部類と考えられます。「乗ること」と「乗り

物」ですから。実際、別に新しい言葉でも何でもないので。江戸時代にはすでに大名の乗る籠（かご）ですとか、人馬、牛馬、それからその前のお公家さんたちの乗った牛車なんかもそうですし、例えば大井川を渡る輦台なんかも乗り物です。そういうものがすべて「乗り物」という言葉で、その時代にも使われていました。近代になり、一般的な公共交通機関が非常に発達してきますと「乗り物」という言葉が更に広がりを見せます。もちろん個人の荷車や自転車や、それから遊戯物に至るまで、それに乗って移動に供したり遊びに供したりするものも、「乗り物」という言い方で処理されていると思います。実際、「乗り物」という言葉が絵本に定着するのは近代、明治の後半になってからです。平仮名の「のりもの」、漢字の「乗り物」、片仮名の「ノリモノ」という言葉が明治の後半の絵本発行ブームの中でもはやされます。乗り物分野の人気の高まるにつれて、絵本の中でも中心的な存在になるのですが、その「のりもの絵本」の歴史とその魅力をこれから語ってゆきたいと思います。

2. 「のりもの絵本」の大分類

先ほどもお話ししましたが「のりもの絵本」には大きく分けまして、知識・観察絵本と、物語絵本とに分かれます。大概どちらかに属すると思えばよろしいのですが、知識・観察絵本は乗り物の絵とそれに付随する文章が解説するもので、一般的に廉価で、先ほど申しました書店の店頭に並んでいるものはこれに属するものが多いです。一方、物語絵本は、乗り物が主題になってストーリーが展開するもの、乗り物自身が主人公になったもの、又は何かができるまでや社会の仕組みを分かりやすく説明するもの、となります。例えば地下鉄ができるまでですとか、東京から大阪までの道順を乗り物に乗ってたどっていくもの、船で航海をする話ですとか。これも観察絵本的ではあるのですが、そこにストーリー的なものを持っていれば、これも物語絵本だと思います。以上が今日まで続いてきた「のりもの絵本」の大きな分け方です。続いて「のりもの絵本」の簡単な歴史についても触れてみたいと思います。

Ⅱ 「のりもの絵本」の歴史

1. 明治期の「のりもの絵本」

明治時代の後半になって「のりもの絵本」は登場します。明治時代の日本においては、印刷物がかなりたくさん出ていました。「画噺本（えばなしぼん）」と称しまして、カラーで木版や石版で印刷された、物語の中心的な絵が表紙になっているものです。中身はほとんど木版なり石版なり銅版なりの活字が並ぶのですが、途中にほとんどモノクロで挿絵が入ってきます。これは講談的な内容が多いのです。例えば、人物伝ですとか、物語と言えば岩見重太郎ですとか。そんなようなものが講談本として、ものすごい発行部数がありました。世界的に見ても日本は出版文化としては誇れるくらい、たくさん出ていたと思います。次第に講談本の中にも乗り物に触れるものも存在したかと思うのですが、児童

向けの書籍としてはそういうものがありました。

一般的な絵画としては、明治の全般含め江戸時代からの続きですけれども、一枚ものの版画で「ペラもの」というものがありました。カラーで木版刷りになっていて、ニュース性もあったり、部屋の中に飾ったり、例えば千代紙の代わりに使ったりするような一枚ものの絵です。「絵草子」という言葉とか、それから「草双紙」とか、そういう「何々し」という言葉を使ったようです。

明治中ごろになりますと、乗り物、電車はまだ出ないのですけれど、特に汽車とか、それから「名所図絵」—例えば「東海道五十三次」でも歌川広重のような絵ではなく、もう少し簡単に木版4色ぐらいで済ましたような、今で言えば廉価もの—が、たくさん一枚もので売られるようになります。次第にそれらが合本されて絵本の形態になっていくわけなのですが、そういうものは大人向けが中心でした。子どもたちには、明治20年代になりますと義務教育の徹底が図られますので、教科書というものがたくさん出てきます。教科書の中で乗り物についてかなり詳しく書いたものとか、乗り物システムを書いたもの、それをまた解説したものなどがありました。一般的には、副読本として生徒に配ったものもあるでしょうし、個人的に購入したものもあるのではないかと思うのですが、それらがたくさん出てきます。その延長線上に「のりもの絵本」というものがもっと低学年や就学前の児童に与えるものとして登場します。それが大体明治30年代半ば以降の話になります。実際、今お話ししたような土壌の中で「のりもの絵本」というものがたくさん出てくるのですが、一挙に「のりもの絵本」が登場するのではなくて、次第に登場することになります。

明治時代の後半になりますと、題名からも「のりもの」とか「汽車」「電車」といった題名の絵本が登場します。これは大変な量が発行されまして、現在絵本のいろいろなものが保存されていますが、明治40年代になりますと、半分は乗り物に関するのではないかな、と思うくらいたくさん出てきます。中心になるのは大阪系の出版社で、榎本法令館というところ—恐らく榎本さんという方がやられていて、その方が画家を兼ねているのではないかな、と思うのですけれども—一から、相当たくさん発行されています。東京では金井信生堂（かないしんせいどう）ですとか、それから島鮮堂（とうせんどう）、小さいものを含めればたくさん出てくるのですが、ほとんどが木版調の絵です。「名所図絵」の簡単な絵に、ちんちん電車が走っていたり汽車が走っていたりするような、今見ると非常に稚拙にも見えるのですが、これらが明治時代の中ごろにはたくさん出たということは特筆に値することです。絵本の発行量をいろいろ調べていますと、恐らくイギリスに次いで、日本が多いのではないかな、と思うくらい、この時期の絵本の量というのは大変なものでした。これから画面で少しそれを紹介したいと思います。

（スライド）まず、画面では話がさかのぼりますが、これは先ほどお話ししました教育絵話、のりもの副読本に近いものなのですが、汽車のシステムを紹介したもので、非常にカラフルに木版で紹介されています。越米版という発行所の名前が出ています。詳しいこ

とはちょっと不明なのですが、明治 22 (1889) 年発行でした。これだけだと分かりにくいので今日現物を持ってきたので御紹介します。(絵本を開きながら) このように B6 版くらいの大きさなのですけれども、折り畳みで(絵本を広げながら) 広げるとこうなるのですけれども、各ページで駅のシステム、機関車のシステム、それからお客さんの乗り方ですとか、鉄道全体をあくまでも教育する「図解絵本」というような形をとっています。

(スライド) これは、先ほどお話した「ペラもの」です。千代紙店とかそういうところで一枚もので売っていた絵です。ニュース性のあるもので壁に貼ったり、そういうものを集めたりする習慣がすでに当時ありました。版画を集めたり、錦絵を集めたりする人の延長線上で、一般の人がこういうものを集めて部屋やいろいろなところに貼ったりしたのだと思います。これは、日英同盟の英国艦隊が来航した時に出た、花電車を描いているものと、その下は軍艦の風景です。非常に鮮やかな色合いで、こういう一枚ものの絵が、絵本が発生する原点になっているのではないかな、と思います。

(スライド) これは「引き札」と申しまして、商店が自分の荷物の上にお客さんを引く、という意味で、今で言えば商標のものの上に乗せる紙みたいなものです。よく反物やなんかの上に乗せたり、家具や和服なんかには昭和 30 年代くらいまではきれいな印刷の紙が載っていたのですが、その原点みたいなものです。当時の機関車ですとか、少し後になると船ですとか、飛行機なんかは、近代的なものの象徴として描かれているのです。これはガラス屋さんの「引き札」なのですが、まったく関係ない機関車が非常に正確に描かれていまして、これ(スライドを指して) はちょっと色としては濃く出ていますが、もっと明るくきれいな絵なのです。「引き札」というのはお客さんを引くため、ということとはさっきお話ししましたがけれども、いろいろな説があります。問屋で自分の商店が購入したのものの上にこれを貼って、それを後で荷物を引いていくという意味で「引き札」と呼ばれた時期もあったということですが、正確なことはよく分かりません。こういうものも絵本の始まる前に土壌としてあった、ということで紹介しました。

(スライド) これは先ほどの「名所図解」の一部なのですが、やはり錦絵なんかから比べれば非常に簡単な版画です。こういった版画が明治 20 年代から日本全国で発行されていまして、これを綴じたものも出てきました。これを綴じれば、まさに明治時代の絵本という形になります。これは仙台駅を描いています。

(スライド) これは先ほどの原始絵本のそれ以前、という感じになるかと思うのですが、教科書副読本の中に工芸シリーズというのがありまして、石井研堂という方が何種類か描いています。「鉄道の巻」というのが非常に詳しく描かれていまして、挿絵がたくさんあって、まるで現在の鉄道趣味書の始まりではないかと思われるくらい描かれています。これは明治 32 (1899) 年の発行なのですが、後ろの方には「鉄道分会」というものが紹介されていて、その分会に出席すると、鉄道省(当時、鉄道員)の人が来て、いろいろ講演してくれたりとか、そういう趣味活動的なものが発生したことが少し書かれていまして、非常に興味深い内容です。

(スライド) これは先ほどありました、明治 30 年代後半に発生する「のりもの」という名前のついた絵本の始まりですね。今回の展示の中にもすばらしいこの時代の乗り物の絵本がありますが、それと大体、同時代の絵本です。人物の描き方が、まだ明治の初期の版画の域を出ていないのですが、ここに機関車がどーんと、真ん中に出てきます。これらはページを開くと全部汽車、電車で埋め尽くされています。すでに「のりもの絵本」の始まりと言えます。

(スライド) これは明治 40 年代に出た絵本で、『きしやのいろいろ』とされていますが、かなり正確に描かれています。場所も東海道線の由比の海岸を描いています。後ろに（進行方向左側に）富士山が見える唯一の区間なのですが、それもこの絵では正確に描かれています。興味深いです。

(スライド) これはその『きしやのいろいろ』の中ですが、大体こんなようなパターンが多いのです。奥行きが余り測られていなくて、遠近法もあるような、ないような絵で、こんな調子の絵が各ページ続くのです。

(スライド) これも明治 40 年代の絵本の一つなのですが、人物がたくさん出ています。この当時の風俗としては、こういうのだったかな、と思うのですけれども、モダンな少年たちを描いています。非常に赤をたくさん使う絵で、これらの本が「赤本」といわれることもあります。「赤本」というのは、後にまた違う意味になってくるのですけれども、当時の絵本の解説の本を見ると、これらも「赤本」という整理の仕方がされていますから、当時としては、このクラスの絵本は赤色がたくさん使われているな、と思われたのではないかと考えられます。

以上が明治時代ですけれども、次第に明治の後半になりますと、雑誌形式で幼年雑誌などが発行されまして、単行本以外に雑誌でも挿絵の中に乗り物が入ったり、巻頭の折り込みに乗り物が付録のような形でついてきます。

2. 大正期の「のりもの絵本」

大正時代に入りますと、今度は絵本雑誌、絵雑誌というものがたくさん発行されます。中には明治の後半から出ているものもありますが、子どもの全体に対するものではなくて、幼稚園に一当時幼稚園に行かれる子どもたちというのはまだ少ないのですが一子どもが通ったりするために、そういう副読本的な絵雑誌がたくさん発行されるようになります。これは明治時代に発行された幼年雑誌とは別として、絵雑誌という言い方が当時からありました。ほとんどの絵が、童謡に係る叙情画ですとか、少し芸術っぽい絵が多いのですけれども、乗り物も途中から入ってきます。この乗り物の絵にかかわった人たちが後々「のりもの絵本」を背負うことになるのですが、非常に優秀なものも登場します。いわゆる童画家という言い方もこのころからで、「のりもの絵本」を描いた画家にも優秀な童画家がたくさん輩出します。

大正 11 (1922) 年には月刊「コドモノクニ」が創刊されます。この「コドモノクニ」は

ものすごく豪華な作りになっていました。用紙が厚くて、とじ方もしっかりとして、印刷の良さは今見ても驚くばかりなのですけれども、これらが後々発行される幼稚園の雑誌の先駆けになっています。

(スライド) これはいわゆる大正時代の絵雑誌なのですが、左から「幼年畫報」。これは明治時代に創刊されていますが、大正時代には全盛期を迎えます。これは多分大正時代の表紙だと思います。隣が「コドモ」です。「コドモ」は大正 2 (1913) 年の創刊です。その右が「赤い鳥」、これは有名な童謡雑誌なのですが、すばらしい表紙になっています。

(スライド) 左は「子供之友」ですが、羽仁もと子さんの主催する雑誌でした。これもすばらしい絵がたくさん出ています。その隣が大正 11 (1922) 年、先ほどもお話した「コドモノクニ」なのですが、これには乗り物がたくさん出てきます。その右側が「コドモアサヒ」で朝日新聞社が発行しています。この時代になると絵雑誌の全盛時代になります。この翌年は関東大震災になるのですが、その復興と共に絵雑誌を始めとする児童書の近代化が始まります。

続いて、この当時の絵本を紹介します。

(スライド) これは「乗物画帖」と言いまして、正光社(せいこうしゃ)というところから出たものなのですが、表紙の視点のすばらしさもさることながら、構図が明治のものとは違って大胆で、乗り物そのものを強調するものになっています。

(スライド) これはその「乗物画帖」の中頁です。大正 7 (1918) 年のシベリア出兵がありました。その当時の日本軍の装備は貧弱で、ロシア(当時ソビエト連邦)を追って、どんどん分捕った「列車砲」なんかが、まるで自分のもののように描かれています。実際、当時の日本には「列車砲」というものが存在しませんでした。当時グラビア雑誌なんかで、日本軍が分捕った「列車砲」がたくさん紹介されていたから、それらを絵本に取り入れたのではないかな、と思います。

(スライド) これは「幼年ポンチ」となっていますが、ようするに「ポンチ」とは漫画のことで、英国の風刺雑誌「PUNCH」から来ています。これもいわゆる絵雑誌の一つで、ポンチ絵(漫画本)を中心にした本だったと思うのですが、「汽車活動」という名前になっています。汽車の活動と言うのは、昔、映画のことを「活動」といいましたので、“movie”をそのまま漢字で直訳したのではないかなと思います。『機関車トーマス』のような、顔を描いた機関車と主人公の絡み合いが非常に面白いのです。これも大正時代だけで、後に無くなりました。

(スライド) これは、「電車トノリモノ」。実際に発行されたのは昭和の初めなのですが、恐らく大正時代に作られたものだと思います。近代的な消防自動車ですとか、中も非常にセンスのよい、明治の絵とはがらっと変わった絵柄で登場します。

(スライド) これは明治から続く横版の「のりもの絵本」の中身の典型です。ページを開きますと隣のページとくっついていまして、このようにワイド画面で、これは当時の最新式の機関車を描いているのですけれども、画家のサービス精神としまして、すき間をす

べて乗り物で埋め尽くしています。言葉でも情景をうまく説明するため、あちこちに入れているのですが、本当に画家のサービス精神が旺盛なことが絵で分かります。

(スライド) これは大正末期の、想像で書いた地下鉄の絵です。昭和 2 (1927) 年に上野から浅草間の東京地下鉄が開通するのですが、この絵本は大正末期ですから、まだ正確には地下鉄というものを把握していない時に描いています。実際に、上野の駅の状況にちょっと似てなくもないのですが、走っている車両が木造の電車だったり、電気機関車が停まっていますけれども、これは実際のものとは異なります。画家の想像で描いて、子どもたちに早く地下鉄というものを知らせよう、という意気込みを非常に感じる絵です。以上が大正時代です。

3. 昭和元年代の「のりもの絵本」

大正時代の終わりから昭和の初めに入りますと、昭和一桁の時代は、まだまだ大正時代を引きずっている絵本も多いのです。しかし世の中、大震災の復興ブームの中、大衆文化が大発展する時期で、高等教育が普及することもあり、出版物が一大ブームになります。大衆雑誌の「キング」ですとか「中央公論」、「改造」等の総合誌が発行されるのもこの時期です。「キング」に至っては、昭和の一桁に 100 万部を突破する勢いで発行されたと言われています。

一方「のりもの絵本」に関しては、昭和 5 (1930) 年くらいまでをみますと旧態依然で、横開きの横版絵本が主流になっています。絵柄もほとんど大正時代に描かれたものではないかな、と思うものばかりです。昭和 5 (1930) 年くらいを境に横版の絵本が縦版になりまして、大体 B5 判なのですが、B5 判を縦にしたような絵本に変わって、近代の絵本の形態に近いものになっていきます。従来の、大正時代からの絵本が薄手の紙を使っているのに対して、厚手の紙を使うのも、昭和 5 年ごろを境にしています。しかも縦版になるために、デッサンが非常に実物に近い、近代的な構図—今までは非常に稚拙な構図が多いのですが—で登場します。この時期から 10 年間くらいはいわゆる「のりもの絵本」の黄金時代になります。

ちょっとさかのぼりまして、大正 15 (1926) 年に「幼稚園令」というものが公布されました。従来「幼稚園令」の教育項目に「遊戯」「唱歌」「談話」「手技」というものがありまして、それに「観察」が加えられることになりました。その「観察」を絵本で普及させるために、フレーベル館が昭和 2 (1927) 年に、観察絵本として「キンダーブック」というものを発行します。この「キンダーブック」というのは今でも出ていますが、皆様も御記憶と思うのですが、幼稚園時代に 1 か月に 1 回配本される形式絵本で、非常に内容が多彩です。観察するものもあれば、手芸のことも書いてあれば、ときに物語もあるし、芸術的な絵もありました。その創刊が昭和 2 年に始まります。幼稚園の月謝に「キンダーブック」の絵本代が含まれまして、直販形式なのですが、当時の頒布形式としては非常に画期的な売り方だったと言われています。

(スライド) これは昭和一桁のころの「キンダーブック」です。この号は自動車の特集をしています。自動車の形式はよく分からないのですが、恐らく、こういう絵本を読んでいる子どもたちの家庭水準は、相当高かったのではないかな、と思います。当時幼稚園に行けるといって自体が大変なもので、東京の中心部の相当な家柄の子弟が通ったと思います。

(スライド) 同じく「キンダーブック」です。戦災に遭う前の東京駅の、ドームの形式だった建物が描かれていますけれども、これは普通の絵本画家ではなく、洋画家が描いています。そのため、油絵調で描かれています。「キンダーブック」は非常に画家を選別しまして、絵本の画家というよりも、本格絵画の教育を受けた一般の画家を、絵本の画家にもしてしまった、みたいなのがありました。多くの絵本画家を輩出した雑誌でもあります。

(スライド) これは「キンダーブック」ですけれども、この号は横版になっていますが、初期はほとんど横版だったのです。銀座通りの交差点を、当時の市電が、行き交う人たちと一緒に賑わいを見せて、非常に品のよい近代的な絵になっています。大正時代の絵から相当進歩しているのがわかります。

(スライド) これも同じように近代的な構図で描かれた、省線電車に乗り込む、遠足に行く子どもたちの風景です。子どもたちの服装と父兄の姿から見ても、相当な教育水準の家かなと思います。この絵は的場朝二さんという方が描かれているのですが、本来は画家だった方で、非常に緻密に描かれております。後の国鉄（日本国有鉄道）になる鉄道省の木造の省線電車が、よく描かれています。

(スライド) ちょっとさかのぼってしまうのですが、大正時代の絵柄をそのまま引きずった、昭和 4（1929）年ごろに発行された汽車です。これも先ほどの絵と同じで非常にサービス精神の多いもので、いろいろ所狭しと描かれています、非常にきれいな版画調の絵です。

(スライド) これは縦版になりまして、構図も非常に近代的で人物を極端に小さく描いて、船の大きさ、雄大さ、出帆風景の美しさを描いています。『ノリモノ』という題名も、片仮名で非常に美しくデザインされた文字になっています。

4. 昭和 10 年代の「のりもの絵本」

昭和一桁は大体、以上のような流れできました。昭和 10 年代に入りますと、絵本も大分また変わってきます。昭和 6（1931）年の満州事変に続いて、昭和 7（1932）年に満州国が成立します。昭和 9（1934）年には流線型で有名だった特急「あじあ」が大連と新京、ハルピン間に登場して一挙に国策路線に沿うわけなのですが、満鉄（南満州鉄道）の誇る特急列車が、子どもたちにとっては大変な憧れになるわけです。最初はグラフ雑誌や新聞のグラビアページなどに特急「あじあ」がたくさん登場するのですが、絵本にも影響を受けてたくさん登場します。子供たちがそれらを見て、大陸への憧れというのが一子どもた

ちも意図したものではないのですが一浸透していくわけです。

昭和 11 (1936) 年になりますと、有名な講談社の絵本がシリーズで発行されます。講談社は日本でも一、二を争う総合的な出版社ですが、そこが絵本にも参加してくるわけです。講談社の絵本シリーズというのは毎月 4、5 冊、多い時で 6 冊ぐらい出ることもあるのですが、全部、1 冊ずつ完結の本で、1 冊に 1 物語ですとか、1 テーマ、歴史上の人物伝、国内外の名作、軍国美談、マンガの特集もありました。知識・観察絵本に属するものも、そこに入ります。その知識・観察絵本の中に『のりものづくし』ですとか『乗物画報』といった形で「のりもの絵本」がたくさん登場します。これが今日における「のりもの絵本」の原点になったと言えるもので、構図としても絵の内容としても近代絵本のまさに始まりではないかな、と思います。

昭和 11 (1936) 年には、日中戦争が始まりますが、今度は「のりもの絵本」が大陸一色になります。先ほど特急「あじあ」の絵本のことを申しましたが、特急「あじあ」の表紙をめくると中は大陸一色で、例えば装甲列車に手を振る子どもたちですとか、特急「あじあ」に手を振る日本と満州国の子どもが、お互いの国の国旗を振っている風景ですとか、非常に戦時色が強くなるのです。

昭和 13 (1938) 年には、内務省警保局図書課より通達が出まして、「児童読物改善ニ関スル指示要綱」というものが出ます。これには様式、活字の大きさ、色彩を始め、片仮名文字を使用、母のページを設けること、などが指導されまして、「のりもの絵本」を一変させることになります。「のりもの絵本」といっても国策路線に沿うことを義務付けたわけですね。

昭和 15 (1940) 年に入りますと「日本出版文化協会」なるものが政府主導で設立されまして、すべてが完全に管理統制されることになるわけです。出版するには絵本といえども事前審査を受け、不要不急のものは一切発行できなくなります。

昭和 16 (1941) 年の開戦後には「のりもの絵本」の発行部数は著しく減少し、内容的にも日本の国策を鼓舞するようなもの以外は全く駄目である、ということになります。先ほどの「キンダーブック」も「ミクニノコドモ」というような日本語の題名に改題されます。しかし昭和 18 (1943) 年には休刊し、先ほどの講談社の絵本も「コドモエバナシ」シリーズという題名に切り替わるのですが、これも昭和 19 (1944) 年に休刊しています。その年代の絵本を少し紹介します。

(スライド) これが先ほどの講談社の絵本です。皆さんも御記憶にあるかと思うのですが、戦後もほぼ類似の形で復刊されていますが、戦前版には「子供が良くなる」というキャッチフレーズが書いてあります。「大日本雄弁会講談社発行」と青く下に書いてありまして、これが非常にインパクトのある表紙です。この表紙を描かれた安井小弥太さんの C53 型の絵、この C53 型が当時最新式の蒸気機関車で、安井小弥太さんの得意とするところですよ。遠近法をふまえた、奥行きのある絵で登場します。

(スライド) これも講談社の絵本のちょっと後になるのですが「乗物画報」です。アメ

リカの機関車を、やはり安井小弥太さんが表紙を描いていますが、非常に力強い機関車で、アメリカの機関車であることを除けば驚くことはないのですが、なぜ敵対国のアメリカの機関車を描かれたかちょっと不思議です。子どもたちはこれを見るとアメリカが物量の国であることくらいは、分かるのですけれども。実は、このシリーズに観察絵本が出ることは非常に少なく、物語的なものでも偉人伝が多いようですね。乃木大将ですとか、楠正成ですとか、日本の皇国史観を植えつけるような内容が非常に強くなって、次第にそれが子ども心にも伝わったのではないかな、と思います。

(スライド) これは先ほどの「乗物画報」の中なのですが、昭和 12 (1937) 年に登場しました 3 両編成の快速ディーゼルカーなのです。名古屋地方で使うつもりで試作して、当時としても非常に近代的なデザインの車両なのですが、昭和 12 (1937) 年に登場して昭和 13 (1938) 年にはガソリン統制が始まって休車状態になり、結局このガソリンカーはほとんど使われないまま終わりました。戦時下を忘れる美しいデザインの車両でした。

(スライド) 同じく「乗物画報」の中なのですが、地下鉄銀座駅の風景です。戦後、僕らが知っているころでも、地下鉄の駅というのは実はすごく暗かったのですが、銀座駅と三越駅前には非常に明るかったのです。恐らくデパートが相当負担したのではないかな、と思うのですが、これは昭和 11 (1936) 年ごろの銀座駅の情景を非常に正確に伝えていますが、下に電車が見えまして、新橋寄りの階段を上がると改札にぶち当たるのですが、その辺りから京橋方向を描いています。現在松屋の連絡通路がある辺りが、すでに売り場になっているのが分かります。人物も非常にしっかり描かれていて、「のりもの絵本」と思えないほど、服装も細かく描かれています。

(スライド) これは先ほどの講談社の絵本シリーズのチラシです。ちょっと見にくいかなと思うのですが、内容の多彩さというのが分かると思うのです。軍国美談ですとか、隣におとぎ話が出ていたり、非常に多様な内容であるというのは間違いありません。

(スライド) これは画家として相当力のある、当代一流の画家が当たっています。この絵本を一冊描くと、1 年くらい食べるのに困らなかったぐらい、ギャラも良かったと言われています。

(スライド) これは一般的な廉価版の絵本で『乗物画報』という題名になっています。どちらかというと大正時代以降の絵柄を踏襲していますが、軍服というのが時代を反映しています。

(スライド) これは先ほどお話ししました昭和 9 (1934) 年から運転を開始しました特急「あじあ」を、木俣武さんが書かれたものです。ちょっとほんわかしたタッチになっていますが、非常に雄大な流線型機関車が満州の荒野を最高速度 140 キロくらいで走ったわけですから、子どもたちが憧れないわけがないのです。

(スライド) これは特急「あじあ」の最後部に連結されている展望車が描かれています。裏表紙が展望車になっているのです。かなり正確に車両を描写しています。色は当時グリーンだったと言われています。

(スライド) これは昭和 17 (1942) 年ごろ発行された「キカンシャ」の表紙なのですが、流線型のパシナ形といわれている蒸気機関車です。ちょっと絵がどうかな、というところもありますけれども、これは時代が時代ですから、あまり正確に描けなかったのかも知れません。

(スライド) これは昭和 17 (1942) 年に発行されました「ノリモノ大行進」という絵本の表紙で、画家の上田三郎さんが担当しているのですが、戦時色もここまできた、という表紙になっています。機関車の先頭に銃を持った軍人を乗せて、列車を運行させる、ということをやっていたようです。この中身を紹介します。

(スライド) これは、敵といえますか中国軍が、撤退する時に破壊していくわけです。それを日本軍が一生懸命復旧している、という絵柄です。

(スライド) これはその復旧した鉄橋を、人々に迎えられて橋を渡ってくる情景なのですが、こういう絵がグラフ雑誌とか新聞にたくさん出ますから、子どもたちも絵本の中にこういうものがあっても、もう不思議ではないのでしょうか。恐らく子どもたちは、戦時色というものを絵本の中で理解していたのだと思います。

(スライド) これもその一部。これは別の本からとっていますが、これも「のりもの絵本」の一つなのです。まさに戦時色、飛行機が非常に正確に描かれています。当時、乗り物の中でも特に飛行機に関しては、ふんだんに絵本の中に登場してきます。というのは、飛行機少年というものを、非常に当時あおったと言いますか、奨励したわけです。ですから、絵本の中に飛行機が、秘密のものはともかく、相当たくさん登場してきます。飛行機少年を育成するというのは当時の国の歴史を見れば、どういう理由であったかというのが分かります。

(スライド) これはその、今の(一つ前の)絵の文章なのですが、このような文章が書かれていまして「空に荒鷲(あらわし)地に戦車」(「かちどきの歌」より)というすごい文章です。絵としてはデッサンが非常にしっかりした絵で、絵本としての水準は昭和 10 年代になると非常に高くなって、まるで科学雑誌の挿絵のような絵でもあります。

(スライド) これは、その時代のやはり店頭で売られた廉価版の絵本の一つなのですが、題名からして威厳のある題名で時代を伝えています。これは昭和 18 (1943) 年ごろの発行なのですが「キクワンシャ」とか、カナ文字を非常に奨励したせいもあって、これは機関車を旧仮名づかいで書いています。「キクワンシャ」になっていますね。この絵は、当時の洋画家としては有名だった画家の生沢朗さんが描かれています。以上が戦時中までの絵本なのですが、話が長くなってしまったので、ここで休憩したいと思います。

<休憩>

5. 昭和 20 年代の「のりもの絵本」

引き続きまして、昭和 20 年代について話させていただきます。昭和 20 (1945) 年の 8

月に運命の敗戦を迎えまして、今まで多くの制限が課せられていたのですが、一挙にそれが解除されてしまうわけです。進駐してきたアメリカ軍による検閲とか制約なんかもあるのですが、それは別として、絵本を出すことそのものがそんなに困難ではないわけです。しかし画家はほとんど出征していたり、疎開していたりですぐには描くこともできず、紙や出版社も焼けていますから、用紙の調達ができないし、出版社の建物も焼けているわけですから、なかなか復活しづらい状況ではあったのです。しかし大阪や名古屋辺りを中心にして、昭和 20 (1945) 年後半に発行の絵本というものも登場します。

昭和 22 (1947) 年ごろになりますと、ベビーブームもありまして、そのための児童書の発行はすごい勢いで急増するわけです。内容的には荒廃した日本の状況を描いてあるよりも、占領国だったアメリカやいわゆる連合国のいろいろなものがよい、という内容が多いのです。特にアメリカの流線型のディーゼル機関車が引く豪華列車、なんていうのが昭和 22 年ごろに見せられるわけですから、これは子どもたちはくぎ付けにされることになるのです。

昭和 25 (1950) 年に入りますと、少し落ち着いてきまして、明るい色に塗られた湘南電車という、東海道線の熱海ぐらいまでを走る、それまでの木造や黒に塗った客車の電車から、カラフルな湘南電車というものが登場しまして、一挙に明るい雰囲気を作ることになります。特急「つばめ」が運転を休止していましたが、これも復活します。民間航空路が再開されたり、外国の豪華客船が横浜に入港するのが、新聞なんかの明るいニュースとしてたびたび紹介されます。当然「のりもの絵本」にも、それらが内容的にも影響してくるわけです。この時代の本を少し紹介します。

(スライド) これが終戦直後に出た『キシヤ』という本です。まず変わったのは、題名が左から書かれるようになります。戦前の片仮名を義務付けたのがそのまま残ってしまっていて『キシヤ』になっています。これは吉岡廉三郎さんの描かれた絵で、この方は画家なのですが、無理やり描かされたのかどうか、機関車がすごく大胆なデッサンで描かれています。しかし、それにも増して横に走っているジープが、その時代を非常によく伝えていきます。僕も昭和 19 (1944) 年生まれで、物心ついたころは東京都内にジープがたくさん走っているのを覚えています。今のパトカーよりもたくさん走っていたのではないかと思います。腕に「MP」と書いた向こうの人のポリスが乗っていました。

(スライド) これも同じような『じどうしゃ』という題名になっていますが、表紙がジープになっています。安井小弥太さんの描かれたジープで、さすがにしっかりしたデッサンになっています。

(スライド) 明治 40 年代から、特急列車は東京から大阪、それから東京から下関間を走っているのですが、一流の特急列車には必ず展望車が最後尾についています。大衆用の、二、三等特急というのは展望車がないのですが、一、二、三等特急というのは、一等車に展望車が必ず連結されているわけです。この列車は歴史で見ていくと、東京から佐世保間を走っていた特急列車ですが、絵本にもかなり正確に列車のマークが描かれています。こ

のマークは「第七軍」という極東地域のシンボルマークを、そのままトレインマークに使っているようです。当時、鉄道省が国鉄に変わるのですが、その当時の豪華な客車を全部かき集めて編成して、定期的に走るわけです。一般列車はほとんど鈍行列車というか、普通列車なのですが、良くて急行列車が一部運転を再開、という時に、そういう列車を退避させて、東京から佐世保、東京から長崎、東京から札幌間を走ってしまうわけです。これらの列車は現在、記憶の彼方から消えているのですけれども、絵本にはこうやって残るといことは、絵本といえども歴史の証人ということの価値はあるかと思えます。

(スライド) これは違う絵本なのですが「キシヤノタビ: Kisha no tabi」、保育社から発行されています。昭和 23 (1948) 年ごろだったと思うのですが、表紙のローマ字を使うことで時代を反映しているのかと思えます。

(スライド) これはその中身なのですが、日本の国内の絵は余りなくて、外国の絵が多いのです。当時、日本が占領していた地域に走っていた機関車を描いているのですが、「チュウカミンコク」って片仮名で書いてありまして、七五調の「やっと 平和の はるが来た」という言葉から始まって「上海 南京 重慶と」という言葉。これ、日本が傷めつけたところを全部書いている、という非常に皮肉な内容になっています。この機関車そのものは、マレー式の大型機関車で、当時、八達嶺 (はったつれい) 越えに使っていた、山岳用のマレー式機関車ですね。絵本に残っていたというのは非常に奇跡かな、と思えます。

(スライド) これも今回の展示に登場します、安井小弥太さんの描かれた『あたらしい汽車』です。これは、グレートノーザン鉄道の有名なディーゼル機関車の 16 両編成の豪華列車で、昭和 20 年代の前半にこういう本が出るわけです。子どもが憧れないわけがないと思います。

(スライド) これは車内の「クラブカー」と言いまして、展望車のすぐ後ろにあります。このような風景が、当時の日本と比較するとずいぶん違うのだな、というのは、子どもたちながらに感じたのではないかな、と思えます。

(スライド) これは小山泰治さんという画家の描かれた『電車』なのですが、非常にしっかり描かれています。昭和 19 (1944) 年ごろから資材が無くなりまして、それまでの国鉄のスマートだった電車が、資材構成でぺらぺらな、戦争を遂行するだけのために作ったという電車です。「モハ 63 型」と言いまして後々、桜木町事件で大量に焼死者を出して姿を消す電車なのです。これは当時をよく伝えている絵で、デッサンとしても非常に素晴らしいものだなと思えます。

(スライド) これも特急列車が復活した昭和 25 (1950)、26 (1951) 年の状況だと思えるのですが、梅本恂さんの描かれた特急「はと」を引く C62 型蒸気機関車です。この C62 型蒸気機関車の表紙というのは後々、この機関車を大好きだった木村貞夫さんですとか、上田三郎さんもたくさん描かれています。特にこの梅本恂さんの特急「つばめ」、「はと」の絵は、すばらしく当時話題になったのです。

(スライド) これは安井小弥太さんの描かれた、先ほど東海道線の熱海までに登場した

湘南電車です。当時、電車の色というのは、ほとんど黒か焦げ茶でした。走っているとみんな真っ黒けになってしまうからです。そういう時代に派手な色のこういう電車が登場して、子どもたちを狂喜させたのは言うまでもないのですが、この色合いが気に入らないので画家の人でも描かない、という話がずいぶんありました。オレンジとグリーンを組み合わせです。現在も少し東海道線ではこのような色合いの電車が残っています。アメリカの鉄道会社の色をそのまま持ってきたと言われていたのですが、定かではありません。

(スライド) これはトッパンの絵本の『でんしゃ』と『きしゃ』です。題名も平仮名が使われるようになります。発行年が昭和 28 (1953) 年で、このトッパンの絵本というのは、絵本画家の皆さんがこのシリーズを描きたい、と言われていたくらい、非常に丁寧に作った絵本でして、紙の質も良ければ印刷の質も良くて、さすがに印刷会社が出した絵本だなあ、と思います。最近ではフレーベル館と一緒になっていて、まだこのシリーズも後継版が出ています。

(スライド) その中の内容なのですが、特急「つばめ」が、当時は米原まで電化しております、EF58 型という流線型の電気機関車が描かれています。先ほどのトッパンの絵本の表紙も EF58 型なのですが、こちらはその機関車を流線型に設計変更しています。特急を引くためには流線型にしよう、ということだったと思うのですが、この機関車は、安井小弥太さんですとか、木村定男さんとかが得意として描かれています。

6. 昭和 30 年代の「のりもの絵本」

昭和 20 年代も EF58 型に象徴されるころになると非常に落ち着いてきまして、絵本の内容も明るくなるのですが、昭和 30 年代に入りますと、昭和 31 (1956) 年に東海道線が大坂まで電化します。特急「つばめ」もこの焦茶色ではまずいということで、ライトグリーン一色に塗り変わって登場するのです。このライトグリーンというのは、戦前に特急「あじあ」が塗られていたのとほぼ似たような色だ、と言われていたのですが、このほぼ黒に近い車体がライトグリーンになるわけですから、大変な変化だったと思います。

昭和 33 (1958) 年に入ると電車特急で「こだま」号、それから九州特急の一後々「ブルートレイン」という愛称がつかますが—「あさかぜ」号が登場しまして、スマートなデザインの車両が絵本にも席捲するようになります。

この時代、こだま型の電車と、あさかぜ型の「ブルートレイン」の表紙が絵本の定番となりまして、しばらく続くようになります。

昭和 39 (1964) 年には、オリンピックを前にしまして新幹線の開業ですとか、名神高速道路ができて「のりもの絵本」の内容を一変するわけです。新幹線の表紙は「夢の超特急」という名前が固定されているような形で、ずっと続くわけです。その時代の絵本をちょっと紹介します。

(スライド) これは先ほどの特急「つばめ」を引いている—これは特急「はと」なのですが—EF58 型がグリーンに塗られている状況なのですが、この絵本は実は絵本ではな

くて、写真版ですから、写真本なのですね。現在は写真の絵本というのは主流になってしまっているのですけれども、「小学館の幼稚園」の付録だけは、当時から写真版を非常に多く発行しておりました。

(スライド) ちょっと前後するのですが、これは昭和 20 年代の情景を描いているのですけれども、由比の海岸を走る特急「はと」の展望車が東京方向へ向かって走っている情景です。木村定男さんの描いた傑作と言われている展望車の状況です。

(スライド) 昭和 33 (1958) 年に登場しました小田急電鉄の SE 車、特急「はこね」です。国鉄線で最高速度が 145km を出しまして、後々こだま型電車を出す時の技術的な資料を提供した電車です。つい最近まで走っていました。

(スライド) これは先ほどの昭和 33 (1958) 年に登場する「こだま」型特急電車なのですが、色合いといいデザインといい、当時、子どもの人気だったことは言うまでもありません。

(スライド) これは「ブルートレイン」なのですが、当時、先ほどのこだま型と共に「のりもの絵本」の表紙を二分した車両です。EF58 型が「ブルートレイン」を引くためにブルーに塗って登場しています。この講談社の絵本は「ゴールド版」と書いてありますが、戦後復刊した講談社の絵本のシリーズの更に改良版と言いますか「ゴールド版」と称されて、戦前のものから皇国史観を取り除いて、軍国主義部分も取り除いて、偉人とか、物語とか、そういうものと観察絵本が合体したような内容になっています。一部ディズニーの絵本もこのシリーズで入っていました。御記憶の方も多いと思います。

(スライド) これが、昭和 39 (1964) 年に登場する新幹線の 2 年ほど前に、実験線で登場した新幹線の 0 系の元になった車両なのです。0 系は窓がちょっと鋭角になっているのに対して、これは丸い窓で、デザインとしてはそんなに悪くはないかと思えます。これが後々の基本になったことは、間違いありません。

(スライド) これも講談社の絵本のゴールド版の表紙です。安井小弥太さんが描かれています。

(スライド) これはどなたが描かれたか分からないのですが、画家の名前がたくさん出ています。近鉄 (近畿日本鉄道) の「ビスタコーチ」と言う、特に東京の人はなじみが無いのですけれども、関西地方の主要な一例例えば大阪の上本町から奈良駅前ですとか、京都の駅前から奈良の駅前を、ビスタコーチの二階バスが走っていましたが、数年で姿を消しました。これもゴールド版の中表紙です。

7. 昭和 40 年代の「のりもの絵本」

以上のような昭和 30 年代は戦後の「のりもの絵本」の黄金時代なのですけれども、昭和 40 年代に入りますと、絵本もまた、かなり様変わりしてきます。

乗り物がテーマの図鑑というものがたくさん発行されてきて、いわゆる学習図鑑ですね。学研ですとか、小学館ですとか、玉川大学、誠文堂新光社ですとか。多くの学習系

の図鑑に、絵本画家がたくさん流れていくわけです。イラストを中心に分厚い図鑑を描くわけですから、画家も大動員されたのです。画家としては一番忙しい時期ではなかったかなと思います。

そして、全国で蒸気機関車が消えることになります。そうしますと子どもたちは無理ですが、大人はカメラを持って蒸気機関車を追いかけていくわけです。昭和 42 (1967) 年ごろから始まるそういう風潮、「SL ブーム」というものが起こりまして、「さよなら運転」を写真でした絵本も登場します。「さよなら運転」がきっかけとなって「のりもの絵本」がほとんど写真版に切り替わっていくわけです。蒸気機関車だけではなくて特急電車、路面電車、私鉄の特急、飛行機、船や自動車、機械化された働く自動車などがカメラマンの分野になります。「のりもの絵本」の中に絵本画家というものがあれば、カメラマンも絵本の画家ではないのですけれども、絵本を担当する作家になるわけです。この当時の絵本を紹介するのは少しはしよりますけれども、一本だけ紹介します。

(スライド) これは東海道新幹線の 0 系を描いた表紙なのですが、このような構図の絵本が、書店の店頭で昭和 40 年代から約 10 年間くらいはたくさん並びます。だれが描いたか分からないくらい形も同じですから、ほぼ同じ構図になってしまうわけなのです。

8. 昭和 50 年代の「のりもの絵本」

昭和 40 年代も終わりますと、図鑑が、子どもが持つには重いくらい、箱入りで立派な絵本になるわけです。そうしますと、内容的に画家が描くのでは追い付かないくらい、仕事が増えてしまうのですね。そうしますと、やむを得ず絵の部分が写真に変わっていくわけです。ですから画家が描いていた図鑑が、写真図鑑に切り替わってしまいます。発行工程のスピードアップが一番の要因ではないかと思われまます。

結局、絵で描く画家が高齢化することで減少していくわけですが、少し残っている画家による「のりもの絵本」も昭和 50 年代が最後で、その後も出るのですが、その後の絵による「のりもの絵本」は、その後出てきた画家による絵本が多いので、戦前から活躍されているような方はこの時期がほとんど最後とされています。

(スライド) 先ほど図鑑的なこととお話ししましたが、これは「のりもの絵本」でも図鑑的な要素が非常に強くなった絵本です。木村定男さんの描かれた絵ですが、飛行機と汽車が描かれています。この図鑑はそんなに厚くないのですが、だんだん厚くなって豪華な図鑑が、昭和 40 年代に多くなります。

(スライド) 前後して申しわけないのですが、昭和 50 年代の写真版の絵本の表紙です。小田急の特急電車が描かれています。「ワールド絵本」として、写真であっても、いちおう絵本であるよ、ということです。

9. 現代の「のりもの絵本」

昭和 50 年代も済みまして、現代の絵本というのは、先ほど言ったような知識・観察絵本

ですとか、乗り物、物語絵本、知識・観察絵本による「のりもの絵本」との区別がほとんどつかないくらい、お互いに重なりあってくることになります。

例えば観察絵本の図鑑として出ている本も、軽装版が出てくるわけです。軽装版の図鑑というのは、もともとの知識・観察絵本に近いものになるのですが、内容的には写真であったり一絵も少し登場するのですが一ほとんど背景のない機関車や自動車がずらずら並ぶようになりまして、一部の人からはカタログみたいなものだ、と批判的に評価がなされたこともあります。

一方、月刊の物語絵本が中心なのですが、各児童書を発行する出版社から「こどものとも」ですとか「たぐさんのふしぎ」、「かがくのとも」、「よいこのくに」などが月刊で登場しまして、ある時は物語、ある時は知識・観察絵本的な内容として、たぐさん登場します。この中に優秀な「のりもの絵本」もたぐさんあります。

新人作家の登竜門にもなっています。時間があれば後に紹介したいと思いますが、時間が押してきましたので、歴史としてはここまでで終わらせていただきます。

Ⅲ昭和期に活躍した「のりもの絵本」画家

1. 安井小弥太（やすい こやた）

そこにお持ちの資料にもありますが、昭和 40 年代まで活躍した「のりもの絵本」画家を御紹介しています。当時、戦前から活躍して昭和 40 年代まで描かれた方がたぐさんおられましたけれども、代表的な人に、安井小弥太さんがいます。安井小弥太さんは滋賀県出身で、日本画家の北野恒富に師事して、昭和 5（1930）年ごろより絵本に転向するような形で上京してきます。「池袋のモンパルナス」と呼ばれた、画家がたぐさん住んでいた椎名町に居を構えまして、先ほどの講談社ですとか「コドモノトモ」ですとか「キンダーブック」などで活躍するわけです。戦前から一躍、安井さんの名を成したのは、まず絵は日本画家の出身ですから丁寧にきれいに描かれるのですが、遠近法を多用してまして、機関車が前に突進してくるような立体感を感じる絵です。当時、人気の高かった C53 型の蒸気機関車がお好きだったようで、この表紙の並ばない本屋さんはないくらい、当時たぐさん売れたそうです。昭和 50 年代まで活躍されていました。

（スライド）これは廉価版の C53 型を表紙にした、戦前の乗り物の絵本ですね。「汽車ノチシキ」としてあります。全部墨で輪郭を囲いまして、そこに色を置くという手法が日本画の特徴だったのですけれども、それがこの絵にも少し残っています。そして遠近法を取り入れていますので、日本画の手法とマッチしているのかどうかは分かりませんが、子どもたちに非常に人気がありました。

（スライド）これは講談社の絵本の中の一部なのですが、やはり C53 型の蒸気機関車が富士川の鉄橋を渡る情景です。これぞ遠近法の見本のような構図で描かれています。遠近法というのは一点にすべて一風景はすべて透視図法もありますが一必ず一点に絵が集まるのです。それが鉄橋ということで、一番奥の点に集約した絵の中でデッサンされていくわ

けです。非常に細かく、鉄橋のトラスの状況も描かれています。

(スライド) これは新潮社から発行された『はしれ機関車』。これは戦後に出された本なのですが、安井さんとしては珍しい、ペン画で描かれた表紙です。新潮社が絵本を発行したということも非常に珍しいかな、と思います。

2. 上田三郎 (うへだ さぶろう)

次に、上田三郎さん。上田三郎さんも安井さんとほぼ同時期に活躍されていた画家で、洋画家出身なのですが、上田さんの場合は線で輪郭を囲わず、面と面、明るい部分と暗い部分の接するところを、絵を見ている自分で線を感じずような形で立体感を強調する、要するに洋画の手法を取り入れています。昭和 10 年代に大活躍しまして戦後も図鑑などで活躍されていました。

(スライド) これは昭和 17 (1942) 年ごろに発行された「機関車ノシュッパツ」という本です。戦時色の濃くなった時の絵で、もうすでに規制がかかってからの絵です。機関車の乗り物の絵といえど、働く人の戦時的な色彩が非常に濃く、どちらかという労働絵画というようなタッチで描かれています。デッサンは非常に素晴らしいです。

(スライド) これも上田三郎さんの、当時の省線電車、横須賀線の電車が描かれています。影の使い方が、非常に巧妙に描かれています。

3. 木村定男 (きむら さだお)

次に、上田三郎さんと同時期に活躍された方で、木村定男さんです。木村定男さんは、実は私も原画などをたくさん見せていただいて、本にもまとめさせていただいたので、非常に詳しく分かるのですが。大阪の美術学校の洋画科を卒業しまして、海軍に出征して、復員後に絵本画家になるのです。ちょうど昭和 22 (1947)、23 (1948) 年ごろからの「のりもの絵本」がブームといわれるぐらい大量に発行される時に、木村定男さんも同時に登場したわけです。当時の半分くらいは木村定男さんが描かれたのではないかと思うぐらい、たくさん出てくるわけです。特に C62 型を引く特急「つばめ」や EF58 型の特急「つばめ」の表紙は、出版社が先生にそれを描かせるために、夜討ち朝駆けでやったといわれるくらい、木村先生はたくさん描かれています。昭和 50 年代まで活躍されましたが、後に東武博物館が開館する時にも、ブラシを使った、当時としては非常に斬新なデザインのポスターを担当していました。洋画家で、油絵もたくさん残されています。木村定男さんの絵を少し紹介します。

(スライド) これは昭和 20 年代の C62 型特急「かもめ」です。機関車をこういう角度で描いて、向こうにももう 1 台描くというのは木村先生の特徴です。

(スライド) これは EF58 型で上に飛行機があります。これも EF58 型が迫力のある構図で描かれています。

4. 小山泰治（こやま たいじ）

次に小山泰治さんなのですが、小山泰治さんは日本商業美術の草分け的存在である、藤沢龍雄さんに師事しました。藤沢龍雄さんというのは「養命酒」のパッケージのデザインですとか、そういう商業デザインでは有名な方なのですが、絵も描かれていました。小山さんは昭和 15（1940）年ごろより講談社の絵本なんかでも活躍されていました。そこを優秀だということで認められて、絵本画家の道へ進むわけです。人物画を好んで描いていましたが、「のりもの絵本」の需要が多かったために、乗り物もたくさん描かれています。デッサン力がすばらしく、まるでカタログに描かれている写真と間違えるような絵を、常に描かれていました。戦後も活躍されていましたが、昭和 60（1985）年ごろから引退され、葉山町の町議会をやられていました。それも最近引退されたということです。

（スライド）これは先ほどお話ししました小山泰治さんが師事した、藤沢龍雄さんの表紙の「キンダーブック」です。すばらしい表情といい、客車の窓の描写といい、ちょっと絵本の表紙とは思えないような構図です。

（スライド）これは小山泰治さんの描かれた、EF58 型が東海道線のトンネルから出てきた情景です。戦後すぐの設計の機関車で、後の流線型に変わる機関車です。

5. 梅本恂（うめもと ひとし）

次に梅本恂さんなのですが、梅本さんも戦後大活躍した「のりもの絵本」画家です。やはり特急「つばめ」をたくさん描かれまして、後に絵本の延長線上で商業界に入り、自動車のイラストなんかをたくさん描きまして、現在でもそのイラスト集が書店にも並んでいる方です。一昨年に亡くなりました。

（スライド）梅本さんの描かれた大阪の地下鉄です。

（スライド）これは特急「つばめ」の表紙で、C62 型を描いています。かっちりしたデッサンで描かれています。

6. 中島章作（なかじま しょうさく）

続いて中島章作さんなのですが、戦前から図鑑、科学雑誌、イラストレーションなどで、昭和 50 年代まで大活躍されていました。昭和 50 年代までは、描かれた絵が再販され、現在でも書店に並んでいます。中央線の絵本ですとか、江ノ電の絵本なんかは現在も手に取ることが可能です。

（スライド）これは中島章作さんが昭和 17（1942）年に描かれた「学生の科学」の表紙、アメリカの「20 世紀号特急」なのですが、すばらしい角度で描かれています。右は昭和 41（1966）年に描かれた乗り物です。機関車は違う機関車を描かれています、先生の好きだった角度がこの 2 点で分かると思います。

（スライド）これは先ほどお話ししました江ノ電の絵で、現在も入手が可能です。

7. 黒岩保美（くろいわ やすよし）

最後になりますが、黒岩保美さん。国鉄の調度品から車両に至るまで、色やデザインに手広くかかわった方で、絵本もたくさん残されています。

戦前は、実家が染物業を営まれていました関係で、日本画家の矢沢弦月さんに師事して、そちらの方に進むつもりでしたが、戦後、国鉄の連合軍専用客車の車内の調度デザインを依頼されまして、その絵がきっかけになって家業をやめて、国鉄に入省したわけです。

湘南電車の色から、特急「こだま」のデザイン、新幹線の室内のデザインに至るまで、多くのデザインに関するものを残しております。絵本では一絵本とはいえないのですが、交通博物館の見学のしおりが歴史に残る絵画集です。昭和 20 年代から 30 年代にかけて、交通博物館の案内としてしおりが出ていました。1 冊 10 円で買えるしおりなのですが、非常に絵がたくさん出ていまして、内容的にも豪華で、今でも語り草になっています。

昭和 50 年代には「たくさんのふしぎ」シリーズで宮脇俊三さんと一緒に多くの「のりもの絵本」を残しました。

（スライド）これは「日本の鉄道」という題名の、鉄道 70 年の時の記念誌の表紙なのですが、御自分のデザインされた湘南電車を御自分で絵に描いて表紙にしました。絵本とはちょっと違いますが、すばらしい表紙です。

（スライド）これは先ほどお話ししました交通博物館のしおりなのですが、右の 2 点が黒岩保美さんの作品です。たくさん絵が出ているので、お見せできないのが残念です。今日も、のりもの画を描く画家が光の当り方を研究する手本になっています。

以上、代表的な、昭和 50 年代まで活躍された「のりもの絵本」画家を紹介しました。

おわりに

後半はしょってお聞き苦しくなってしまったと思います。実は現代の「のりもの絵本」も御紹介したかったのですが（資料の中の）リストにあるのは、これだけが優秀な絵本とか、そういう意味ではなくて、現在でも入手可能であって非常に楽しめる絵本です。一部入手不可能なものもあるのですが、図書館などへ行きますと、あります。それぞれが活躍されている画家の皆さん、作家の皆さんの秀作で、この図書館にもほとんど収蔵されていますので、もしお時間のある時は、ぜひ御覧になっていただければ、と思います。

以上のようなわけで「のりもの絵本」の歴史が中心になってしまいましたが、どうか「のりもの絵本」を今後ともいろいろな角度で見いただければ、そして今後も「のりもの絵本」がたくさん読まれることを祈念しまして、お話を終わらせていただきます。ありがとうございました。